

エコーをはじめたきっかけ

都竹伸哉

医療法人城東整形外科

医者は何でも治してくれるスーパーヒーローだと思っていた。整形外科医は痛いと言われたら原因を見極め、「痛み止め・湿布」という万能薬で治してくれるものだと思っていた。しかし、しばしば「わからないけど、とりあえず」出され効かないこともあり、夢見ていたヒーローなんていないと気付いてしまった。そのような考えを変えてくれたのが、運動器エコーだった。エコーを使って診療することで痛みの原因を突き止め、その場で治すことができることに気が付き、エコーを始めて整形外科に進む決心をすることとなった。

運動器エコーとの出会いは、初期研修医時代に心エコーを学ぶために参加したエコー研究会だった。ハンズオンまでの空き時間に偶然受けた講義は、当直明けで臉が閉じかけていた私を一気に引き込んでいった。それは皆川洋至先生による、整形外科の常識を尽く覆す運動器エコーの講義だった。「靱帯や神経ってこんなに綺麗にみえるんだ！」という感動と、「水で痛みが治る!？」という衝撃の連続。局所の痛みは局所で治すという考えのもと、痛みと真っ正面に向き合う姿はまさに憧れのヒーロー。心踊ってすぐに病院へ戻り手に取ったのは、セクタプローブではなくリニアプローブだった。しかし、みえない。講義で芸術のように映っていた絵を自分では出せず、達人にしかできない技だったのだと落胆したものだ。

エコーを諦めかけていたある日、人づての紹介で SMAP (Sonography for MSK Activating Project) という若手エコー研究会に参加した。若手医師たちが生き生きと楽しそうにエコーを使いこなし、「若手だってできるんだぞ！」と語る背中には私に希望を与えてくれ、何度も描出・注射の練習を繰り返した。少しずつエコーで診断できるようになるとどんどん楽しくなっていく、初めてのハイドロリリースは劇的な改善をもたらした。「新人の自分だってできるんだ！」と小さくガッツポーズしたあの日は忘れられない。幼い頃に思い描いていたヒーローに一步近づいた瞬間だったと思う。この経験からエコーを本格的に始める決心をし、整形外科の道へ進むことに決めたきっかけとなった。



SMAP 集合写真 この研究会が若手の私たちに希望を与えてくれる。